

日中における〈分かちあい〉方式による授業研究の 実践研究

—〈上海市閔行区教師研修〉と〈電大理工学生の研修〉から—

小 島 勇*・陳 致中**・徐 国 梁***・佟 輝****

Practice research on“<Sharing>style lesson study” in Japan and China.

KOJIMA Isamu, Zhi-Zhong Chen, XU Guo Liang, TONG Hui

Abstract

This study is a comparison of researches on teaching by <Sharing> style method in Japan and China. Three cases are dealt with: “students’ researches on teaching in Tokyo Denki University,” “The Experimental Base for Shanghai Teacher Training Center (3/24,” and “Affiliated Middle School of Shanghai Teacher Training Center (3/25.” We also refer to our studies on “<Sharing> research on teaching for incumbent teachers’ training,” which we reported at the first international conference of Research on Teaching at Tokyo Denki University on August 27, 2011. Those practice researches make it explicit that the <Sharing> method enables teachers and students to work on issues together and teachers in Japan and China to cooperate with each other. “<Sharing> research on teaching” was “a method of supporting the teacher’s growth and development.”

Keywords: Sharing style lesson study, Collaborative learning, Practice-research, The 1st International research on teaching association, Japan and China.

1. はじめに

本研究は、筆者の小島が開発提案してきた「〈分かちあい〉方式による授業研究と研究協議（以下：「〈分かちあい〉授業研究」を、日中における実践研究の立場から実際の効果を検証したもの

である。

本論では、最初に①本学理工で小島が指導している「学生に対する〈分かちあい〉授業研究」の特徴と概要（下記2）を紹介し、次に②2011年3月24日上海市閔行区中小学校教主任研修会、翌25日上海市師質培训中心実験基地附属中学校にて小

* 共通教育群教授 Professor, Division of Liberal Arts, Natural, Social and Health Sciences

** 情報システムデザイン学系教授 Professor, Division of Information System Design

*** 上海市閔行教育学院長 Principal, Shanghai Minhang Teachers Education Institute

**** 上海市師質培训中心実験基地：主幹 Chief editor, The Experimental Base for Shanghai Teacher Training Center

島が講演・研修指導した「<分かちあい>授業研究」の成果と課題をとりあげた。上海の二回の「<分かちあい>授業研究」の展開では、上海市の教員が「<分かちあい>授業研究」をより理解し易いものとするため、本学理工学部3年生4名（現4年）が「デモンストレーション授業と研究協議」を実践研究の立場から実施した（下記、注参）。その結果は、上海の教員また教育関係者からも高い評価を得たものとなった。

そのため本研究では、上記②の上海教員による授業研修体験と研究協議アンケートを実践データとし、また同行の理工学生の授業研究のとり組みとまとめを①の電大理工の実践研究の発展資料と扱い、日中における「<分かちあい>授業研究法」の一つ目の検証から考察した。二つ目は、上記3月の上海講演の授業研究交流が契機となり、③8月27日（土）理工鳩山キャンパスで「第1回・国際授業研究大会」（主催：臨床的教師研修学会）を開催し、上海の現職教員（教育関係者含）を招き、日本の現職教員も参加し「日中の授業研究交流」を実施した。また大会の中で、「<分かちあい>授業研究」の現職研修への適用例と効果について、（a）日本側「神奈川県教育委員会（旧）愛甲教育事務所」の担当指導主事（田所）と、（b）中国側「上海市師質培训中心実験基地」の佟が、実際の研修事例から研究報告にとりくんだ。

この二つの事例の研究報告の検証を通じて、本論文で、「<分かちあい>授業研究法」は、学生と現職教員が協働研修にとり組める方法であり、また日中間で共通にとり組める授業研究法であることを明確にした。また「<分かちあい>授業研究」が、多様な教師の授業研究ニーズに答えるものであり、教師の成長発達を支援する研修法であると結論づけた。（注）平成19年度、神奈川県教育委員会（旧）愛甲教育事務所主催の初任者研修における小島の講演指導の際、4名の学生による「<分かちあい>授業研究」デモンストレーションとして取り組んだ方法を、上海の講演に適用した。）

2. 電大理工学生の<分かちあい>による成長

<分かちあい>は、学生の<学び>への意欲と互恵的学習（また研修）関係を育てる方法である。

授業研究では、学生たちが「授業を見る力」「授業をつくる力」「授業を教える力」の専門的資質を効果的に向上させる研修方法である^{（注1）}。

<分かちあい>は、各自の<気づき（感想・意見含）>を尊重した相互傾聴学習である。学習者の声は、そのままグループ内で受けとめられ、発言者に対する意見や反論もなく（自由な）語り>によって語る者はより自らの<気づき>や課題を反省的に深めていく。また聞く側は傾聴を通じて相互の見方や違いを認め、他者の<気づき>から学んでいく。<分かちあい>学習はどのような気づきも、疑問も自由に語られ、また語らずともよく（「発言のパス」も可）、学習者はそのままの姿で尊重される方法である。課題に対しては、解決のための具体的な提案（改善策）を基盤とした「話しあい」「ロールプレイ検証」を設定していく。通常<分かちあい>は3名のグループワークを基本にすめる。方法上も時間保証の上からも実践が容易なためである。司会はワンサイクルの<分かちあい>で順次交代、学びの場と役割も均等化する。

(1) 現職教員と<分かちあい>による協働研修

<分かちあい>授業研究で育った学生たちが、現職教員と協働研修で授業研究にとりくめるまで短期間で成長することも、<分かちあい>方式の大きな成果といえるものである。理工における「<分かちあい>授業研究」では、これまで多くの現職教員また大学教員、指導主事や教育関係者の参観があり、その前で、学生が模擬授業をし、その後、参加者たちと授業研究協議をし、授業指導力を向上させていることも大きな特徴になっているものである。

一例であるが、2011年7月6日（水）3限「教育実践研究」に、「埼玉県高校数学研究会・西部地区教育課程研究委員会」の現職教員30余名が、教育実習直後の4年生の研究授業（実習校の研究授業を再現し検証）を参観し、その後<分かちあい>協議を体験、学生たちと授業研究に取り組んでいる。学生には多くの学びの機会となるものである。研究授業に取り組んだ清野純樹（4年）の感想である。

・<分かちあい>研究協議から、数学を担当し研究されている先生方から、専門的な分野の教材把握や改善案を多数いただけたのでとても有意義であった。
・学生たちだけの授業研究では得られない現場からの意見も多数頂けたことにより、自分の成長にもなり、また参加者全員の成長にもつながったと思う。

(2) 学生による授業研修会の継続，学会発表

授業研修実行委員学生が主催する「学生の手による〈分ちあひ〉による授業研修会」は、(小島が本学理工に就任以来10年間で)過去15回実施。また、この間2回の全日本学生授業研修大会が開催されている^(注2)。学生たちとの授業研究と研修のとり組みは、日本教師教育学会また日本教育方法学会において代表学生らと実践研究の立場から共同研究発表を継続し、その効果と課題なども検証してきた^(注3)。

3-1. 上海市閔行区の教育および現職研修の課題

(1) 概要(急増する生徒，学校と教員数)

上海近郊の閔行区は、ここ15年間、上海の人口導入地区であるため人口は急増。子どもたちへの教育保証のため毎年、幾つもの学校新設に迫られている現状である。(注)例えば2008-09年の一年間で人口50万人増、生徒2万人増、教員1千人増。小中8校400クラス新設でも追いつかないのが実情である。

また区内の子どもたちは、大学卒でない原住民と外来労働者の親が多数で、また幼稚園で事前の充実した教育を受けていない児童も多い。そのため入学後の学習意欲も高くなく、中心地域の子どもたちとの学力差も大きい。このような子どもたちの学力差に対して、各学校はどのように子どもたちの格差を埋め、また個々の学習意欲を育てる授業指導をするかの課題に直面している。区では、教員を全国から募集し、また師範大の卒業生も積極的に採用している。しかし教師間の授業指導力の差も課題である。

これらの課題に、閔行区教育学院は現職研修の支援指導の立場から、どのように学校と教師のサポートにあたり、また教師の授業指導力をどう高めるかを重要な課題としている。例えば教育学院では2005年から「カリキュラム改革と教師の専門化成長」を研究課題として区全域で展開し、また学校ごと教科(教科組)による「仲間協働(仲間合作教育研修)」の校内研修を推進してきている。これにより各学校の校内研修の水準を明確に設定し、授業に注目すること、授業を診断すること、お互いに仲間の教師を助けること、経験をわかち

あうこと等を通じ、教師相互の授業指導力を高めることを目的としてきている^(注4)。

(2) 小島式〈分ちあひ〉授業研究法への注目

5年間の「仲間協働」校内研修事業により各学校ごと成果も上がってきている一方、急激な区の変化や父母の教育要求もあり、現職教師が望んでいる研修との距離も課題がみられてきている。

このような上海閔行区の現職研修の現状から、筆者の徐と佟は、小島の「〈分ちあひ〉授業研究」を知り、上海中小学校の現職教師の研修に有益と考え、3月に区中小学校研究主任と算数・数学教科主任対象の「〈分ちあひ〉授業研究」の研修会を企画し、小島に講演依頼とした。

(3) 理工3年生の模擬授業が、授業交流の橋渡し

小島と学生4名の上海研修準備は、2月中旬からスタートした。しかしその後、間もなく3月11日発生の「東日本大震災」に遭遇し、交通全面ストップ、2名学生が一夜大学(研究室)に留め置きされ宿泊等、また福島原発事故の影響により計画停電で講演用パソコンもパワーポイント使用の時間制限も心配せざるを得ないなど、上海直前まで様々な困難に直面した事態となった。一方、上海側の徐、佟ら研修関係者も、日本の甚大な震災被害を鑑み、今回の実施は難しいと危惧する中で開催できた講演研修であった。このような状況下もあり、小島の講演と学生たちの「〈分ちあひ〉授業研究」の模擬授業も、上海関係者と現職教員から温かい歓迎を受け、その後の国際授業研究大会への連携と発展する機会となった。以上が、日中における初めての「〈分ちあひ〉授業研究」の実践交流の背景である。

二日間の通訳は、共同研究者として参加した陳がとりくんだ。また同行3年生4名は、小島担当「教育実践研究入門」(教育実習事前指導科目:後期9月開始15コマ)履修を終えたばかりで、小島から見て「実習校を通じる授業指導力によりやく届いたレベル」と言えるものであった^(注5)。

3-2. 上海における〈分ちあひ〉(1)

(1) 3月24日(木)上海市教員研修会(開催要項)

1. 研修名:上海市閔行区中小学校教科主任研修会
2. 目的:上海における教員のライフステージに即した

- 研修体系を尊重し、教員相互の専門性と授業指導力を向上させる教員研修（小島勇『臨床的教師研修』）を学び、実践的指導力の育成を図る。
3. 日 時：3月24日（木）9：00～17：00
 4. 主 催：上海市師質培訓中心実験基地（研修担当：佟）
 5. 参加者：閔行区中小学校研究主任&算数／数学教科主任対象（200余名）
 6. 講 師：小島 勇（東京電機大学理工学部教授）
 7. 共同研究：陳致中（情報システムデザイン学系教授）
 8. 共同研究・研修学生：矢城東（理工学部サイエンス学系3年）／高橋 翔（3年）／橋本健太郎（3年）／清野 純樹（情報システムデザイン学系3年）
 9. 研修日程及び内容
 - ① 9：15：受付
 - ② 9：30：開会、挨拶、日程説明
 - ③ 9：45：講話・演習「＜分かちあい＞による授業研究及び研究協議」（講師）小島 勇

『臨床的教師研修』（直面した課題から教師発達の研修）
—「模擬授業と研究協議で、実践的指導力を高める」—

 - 1) ＜分かちあい＞説明、演習
 - 2) 電機大理工学部生の「デモ授業&協議」（高橋）

★半年で、教育現場に通じる授業指導力向上の実際／
★現職教員や学会関係者との協働研究の実践を知る

 - 3) 質疑応答（＜分かちあい＞研修法の学習） - ④ 11：30：課題研究1. 「＜分かちあい＞研修」★上海教員による模擬授業（肖先生）＜昼＞
 - ⑤ 13：30：課題研究2. 「授業づくり研修」（④課題を克服する取り組み）
 - 1) 生徒の興味関心と学習意欲を育てる導入（15分）
 - 2) グループによる授業練習（トレーニング）
 - ⑥ 14：00：授業研修会／代表グループの授業と協議
 - ⑦ 15：10：全体「グローバル社会の中の子どもと教育—教師の成長発達から教育課題の克服を」
 - ⑧ 15：40 閉会

(2) 講演・研修の評価（アンケートまとめから）

24日の一日研修は盛りだくさんのとり組みで、アンケート配布の時間が無く、後日、佟らが参加教員に配布。回収は70であった。結果は、下記データが示したように講演の評価は、すこぶる高いものである。また＜分かちあい＞方式の興味と理解も高く、自由記述からも＜分かちあい＞の意義が、参加者に明確に把握されていることが判明する。

① 選択肢アンケート

- 問1. 講演内容は良かったか。 【=99%が肯定】
1. とても良かった (26)。
 2. 良かった (43)。
 3. どちらでもない (1)。
 4. あまり良くない (0)。
 5. 良くない (0)。
- 問2. 配布資料は役に立ったか。 【=97%が肯定】
1. とても役にたった (26)。
 2. 役にたった (41)。
 3. どちらでもない (2)。
 4. あまり役にたたない (0)。
 5. 役にたたない (0)。

問3(1). ＜分かちあい＞を理解したか。 【=89%が肯定】

1. とても理解した (32)。
2. 理解した (30)。
3. どちらでもない (8)。
4. あまり理解できなかった (0)。
5. 理解できなかった (0)。

問3(2). ＜分かちあい＞を実践したいか。 【=93%が肯定】

1. 是非実践したい (23)。
2. 実践したい (42)。
3. どちらでもない (5)。
4. あまり実践したくない (0)。
5. 実践したくない (0)。

問4. 学生による＜分かちあい＞を取り入れた授業研修を見て関心が深まったか。 【=91%が肯定】

1. とても関心がある (23)。
2. 関心がある (41)。
3. どちらでもない (6)。
4. あまり関心がない (0)。
5. 関心がない (0)。

問5. ＜分かちあい＞を取り入れた授業研修を取り入りたいか。 【=89%が肯定】

1. とても取り入りたい (24)。
2. 取り入りたい (38)。
3. どちらでもない (8)。
4. あまり取り入りたくない (0)。
5. 取り入りたくない (0)。

② 自由記述による結果

<◎良い点>

- ・講演が新しい形式、参加者全員興味を持った。
- ・一番印象的なのは誰もが主役。新しい模擬授業で啓発された。
- ・講演の良い点は、互いに協働し、即フィードバック。
- ・研修は参加者全員が実践、自分の能力を高めた。
- ・講演の良い点、どの参加者も主役。授業者に意見する時、授業者の考えを尊重し、またロールプレイも同じ扱い。この方法により皆協力し話あい、＜わかちあい＞で皆自分の授業指導力を高めた。
- ・＜わかちあい＞授業研修は、普段の「仲間合作教育研修」と少し似ているが、理論が進んでいる。信頼ある研修環境を作り、参加者が平等の雰囲気協働。具体的改善の提案や＜分かちあいルール＞は、我々の日常教育活動に適用できる。教師の授業設計を否定することなく、具体的改善案を出すことは重要な理念。
- ・研修は、参加者の協働性を重視し、実践性が強い。
- ・講師の先生は、真面目でいながら面白い。
- ・平等、尊重、相互協力の雰囲気の授業研修は、個性的な教師を育てることを重視している。3人組＜分かちあい＞方式で、全員協働の参加で助かる。
- ・一番重視するのは（注：多くの教師の共通視点ではなく）、ひとりひとりの教師の創造性を注目している。
- ・講演、ロールプレイ、模擬授業より＜分かちあい＞授業の方法やルールがはっきり見えた。この方法は、新任教師の授業指導力の向上に非常に効果がある。
- ・参加体験型の研修で、＜分かちあい＞を理解。これからの仕事で活用したい。
- ・教師の個性を尊重し、特色ある教師を育てることに有利です。
- ・今回の研修の最大の評価は＜分かちあい＞を感じ、＜

分かちあい>を体験、<分かちあい>を学ぶ。

<◆具体的改善案>

- ・時間の関係で、参加教師が直面している課題を解決する時間が短かった。(小島注：<分かちあい>方式による直面課題へのグループワーク時間保証)
- ・3人グループは良い方法だが、余り知らないので深くまで話し合うことができなかった。
- ・教科別グループのほうが、もっと効果的だった。
- ・初めての研修参加で慣れていかなかった。自分が事前準備した課題は講演テーマに合わなかった。
- ・参加者人数が多すぎた。・模擬授業では数学だけでなく他の教科も関連が欲しかった。
- ・通訳が時間かかったので、効率アップが望ましい。
- ・日本語からの通訳など言語面で、講座に多少影響があった。・同時通訳を使えば、一層効率を高めた。

(3) 模擬授業学生のみとめ (理工3年 高橋 翔)

4名の学生には2月中旬より、「講演資料」と「授業関係資料(指導案・教材・授業台詞(台本))」も全てパワーポイント作成とし、また可能な限り中国語の翻訳とすると指導したため、4名生にとっては全体日程資料づくりも重なり膨大な仕事量となり(震災影響もあり)、授業担当学生が授業練習する余裕はほとんど取れなかった状態となった。しかし、上海講演の中、模擬授業にとりくんだ学生も上海教員に劣らず授業にとりくみ、他学生も研究協議を共にした。これは昨年9月からの半年間の授業研究を通じ高めた「授業を見る力」「授業をつくる力」の賜である(昨年度4年上級生のよいアドバイスと授業づくり支援指導もある)。最初に模擬授業にとりくんだ学生(高橋)は、授業指導における課題もよく把握しながらも、<分かちあい>授業研究が、日中で共通にとりくめることを発見する機会としている。

((注)：日中の授業研究比較のため学生・高橋の授業と研究協議の後、上海側から肖教員が担当クラスの生徒(10名ほど選抜)に研究授業を実施した。))

今回の上海研修は、自分にとっては、ハラハラドキドキの体験でした。理由は二つあります。まず、一つ目は、前日まで時間が無くりハーサルを一回もせずに本番に挑んだという点です。今回、日本で大規模な地震が重なって起こったため、時間が取れなくなってしまったため、このような結果になってしまいました。二つ目は、学習対象が日本人ではなく、中国人だという点です。この点では、言語の壁があるため、自分の

言語が果たして中国で伝わるのか不安でした。この二つの理由もあり、私は授業当日まで緊張つづきでした。

しかし実際、24日大勢の前で授業をやってみて、これまで抱いていた不安がなくなりました。それは、授業の中でとりくんだ会場での机間巡視のおかげです。演壇から降り(ホール200名以上の先生方の中に入り)、机間巡視の際、中国の先生が答えを書いたプリントを私に見せてくれた時、「OK」と言うと、笑顔で返してくれました。このお陰で、まだ緊張はあったもの、それに負けず授業を続けることが出来ました。

今回の授業では、陳先生に通訳していただきました。そのため実際には授業時間が倍になっていたのに、自分はそれほど長いとも感じず、むしろ短く感じていました。理由は緊張し、教えることに夢中で持ち時間を忘れてしまっていたためです。それが原因で授業内容も短縮してしまったことが残念です。しかし、授業は楽しく取り組みました。教師は指導時間を意識する、この事は今後、教師になるための課題といえます。4年生の時の教育実習では、この課題を解決していきたいと思いました。今回、自分の授業だけではなく、先生の講演また橋本君の授業でも感じたことは、日本語と中国語の違いを超えて、お互い分かりあえることができると学びました。このことを含め今回の上海研修会は、教育実習前の自分には、とてもいい勉強になりました。上海研修会で学んだことを実習でしっかり生かしていきたいと思っています。(以下、略)

3-3. 上海における<分かちあい>(2)

(1) 3月25日(金)上海市師質培训中心実験基地・附属中学校校内研修会(概要)

1. 目的：上海市師質培训中心実験基地附属中学校における校内研修の取り組みを通じて、教員相互が、個々の生徒の課題への共通理解を深め、学習場面で興味関心を引き出す「授業研修」を体験から学び、これからの授業実践への活性化を図る。
2. 13:30:校内研修会
 - (1) 校長先生挨拶、挨拶、講師紹介
 - (2) 講演(小島)『臨床的教師研修』(教師が直面した課題から学び育つ研修方法)―学生の授業指導力を育成する<分かちあい>研修―：模擬授業と研究協議で、実践的指導力を高める
 - (3) 理工学生による「<分かちあい>授業&研究協議」デモ授業(授業者：橋本)
3. 15:10:附属中教員による授業&「<分かちあい>授業研究」(授業者：寧惇先生)(以下、略)

(2) 講演・研修の評価(アンケート結果)

25日附属中のアンケートは、39枚の回収、結果は、以下の通りである。

① 選択肢アンケート

問1. 講演内容は良かったか。 【=100%が肯定】

1. とても良かった (14)。2. 良かった (25)。3. どちらでもない (0)。4. あまり良くない (0)。5. 良くない (0)。

問2. 配布資料は役に立ったか。【=95%が肯定】

1. とても役にたった (9)。2. 役にたった (28)。3. どちらでもない (2)。4. あまり役にたたない (0)。5. 役にたたない (0)。

問3(1). <分かちあい>を理解したか。【=95%が肯定】

1. とても理解した (8)。2. 理解した (29)。3. どちらでもない (1)。4. あまり理解できなかった (1)。5. 理解できなかった (0)。

問3(2). <分かちあい>を実践したいか。【=95%が肯定】

1. 是非実践したい (12)。2. 実践したい (25) 3. どちらでもない (2)。4. あまり実践したくない (0)。5. 実践したくない (0)。

問4. 学生による<分かちあい>を取り入れた授業研修を見て関心が深まったか。【=85%が肯定】

1. とても関心がある (9) 2. 関心がある (24) 3. どちらでもない (6)。4. あまり関心がない (0)。5. 関心がない (0)。

問5. <分かちあい>を取り入れた授業研修を取り入れたか。【=85%が肯定】

1. とても取り入れたい (12)。2. 取り入れたい (21)。3. どちらでもない (6)。4. あまり取り入れたくない (0)。5. 取り入れたくない (0)。

②自由記述による結果

<◎良い点>

- ・教師の個性的な授業を尊重し、普通の教師研修活動で運用できる。
- ・教育実践に運用すれば、一定的な効果はあるはずです。
- ・もっと聞きたい、またやってみたい。
- ・この方法は簡単でやりやすいですが、内容が豊かです。
- ・わかちあい授業研修を自分の授業に運用することを期待している。・役に立つと思う
- ・<わかちあい授業研修>にとても興味がある、学生の趣味を引出すことができるはずです。(注：中国では生徒を「学生」)
- ・<わかちあい授業研修>は自分の授業指導力をアップすることができますが、やはり話し合いチームや自分の考えを出したい仲間が必要です。
- ・<わかちあい授業研修>は校内教科組内の検討にはとてもよいです。
- ・大体<わかちあい授業研修>の意味がわかりました。

(3) 学生のまとめ

25日附属中の研修会では、理工学生3年の橋本が最初に、その後、附属中の寧教員が、それぞれの立場から工夫ある授業にとりくんだ。教育実習前の橋本は、実習校の担当学年で予想される「乘法公式」とした。(上海訪問前、学生らには、日

本と中国の教科書の比較検討と、また指導方法の違いなども考慮させた上で模擬授業にとりくむ指導とした)。また<分かちあい>の説明は、両日とも、学生の矢城が上海の教員に対して説明した。学生たちの感想である。

①<模擬授業学生・橋本健太郎>

上海研修会の話が持ち上がったのは、2011年1月末。具体的に参加メンバーが確定し、作業を開始したのは2月中旬。3月11日(金)午後2時46分、マグニチュード9.0を記録する「東日本大震災」が発生。これらにより実際の作業期間は1カ月程度という恐ろしいスケジュールで、上海研修会の準備は始まった。瞬く間に講演当日が迫った。学生はフライトの関係で、前日夜12時頃、浦東空港着。そのまま午前5時近くまでリハーサルと準備作業を行った。特にPowerPointの講演と授業では、スライド1枚1枚に気を配り、また言語が違うため、話す言葉も短文にし、セリフにも工夫を凝らした。

24日の小島先生の講演の様子は、我々学生には受講している教職科目の一つにすぎない授業風景そのものであったが、上海の先生方にはとても刺激的な内容であった。いつものように実践している<分かちあい>が、上海のような競争世界には画期的な話し合い方法のようであった。講演で、改めて小島先生の偉大さを知った。

また講演の中で、上海の先生の模擬授業があった。日本で事前の予想通り、上海の授業スピードは格段に速く、日本人の私たちには塾の講師の指導を思わせる授業に思えた。しかし、発問1つを取っても洗練された言葉であり、生徒が笑顔で生き生きと活動できる工夫にそったものであった。子供たちが楽しそうに授業に参加している様子からは、子供たちに無理がない課題であり、好奇心を湧きたてる素晴らしい授業内容であることが伺えた。むしろ日本の方が授業を改革しなくてはいけない課題と容易に想像できた。

25日は附属中で、大学の授業研究の紹介という位置づけで未熟ながら模擬授業を担当した。単元は、「乘法公式」。授業場所は、敵陣とも言える本拠地・附属中である。当日までの練習期間はごく短いものであったが、自分の中では事前準備を含め堂々と発表できたという感想だ。

研究協議で一番の問題になったことは、日本と中国の教材観・教育観の違いである。日本の教科書では、乘法公式を4つあるものとして捉えるように受け取れる表現である。しかし、中国の教科書では、 $(x+a)(x+b)=x^2+(a+b)x+ab$ を基本式として、代数的に考える手法を採用している。つまり、この式をベースに $b=a$ や $b=-a$ などに置換して考えるということだ。この点から、日本の教科書も、再度見直す必要があるように感じた。

上海研修会の話が持ち上がった後、準備期間はおおよそ1カ月。ほぼ毎日集まって、寝る間を惜しんで準

備をしたが、準備はまったく間に合わなかった。しかし、上海研修会は無事に大成功で幕を閉じた。日本の代表としてこの研修会に参加できたことを誇りに思っており、この研修会で学んだことを同級生や後輩に引き継ぐことが、最大の使命であるように感じている。(以下、略)

②「<分かちあい>の説明学生」・<矢城 東>

〔略〕・上海の学校に到着して一番初めに驚いたことは、上海の先生の熱意やパワフルさです。どの先生方も若々しく、“体から熱気が立ち上っているのではないか？”と思うほどで、同時にとても親切で丁寧な先生が多く、日本とは大違いだなと思いました。また、中国の生徒たちの目がとてもキラキラしており、問題を解いているとき、集中しているながらもとても楽しそうに取り組んでいる姿には感動を覚えました。上海の授業は日本の授業の倍以上の進度なのにも関わらず、生徒が自分で考える時間が日本の倍以上あるのには驚き、上海のやり方の方が生徒のやる気を持たせられ、また、先生が生徒のやる気を引き出すようにワクワクする授業をしているからだなと思いました。日本の先生に熱意が無いとは言いませんが、生徒のやる気を引き出すことが足りていないのではないかと思い、教育実習に行くまでには少しでもその力が身につけられるように授業練習に力を入れようと思いました。(以下、略)〕

- ・直観的な図形の面積を求めるから説明すると、学生が理解しやすくなる。(注：上海は「生徒」を「学生」と表現)
- ・全体の学生を尊重、理解出来ない学生を指導している。
- ・流れは、はっきり見える。
- ・やさしいから、学生は無理なく、楽しい勉強ができる
- ・リズムと把握が良い、雰囲気が良い、授業過程がよく見え、簡単に理解しやすい。

◆具体的改善案

- ・学生が間違ったとき、もっと時間をあげたほうがいい。
- ・「 $X^2+ax+bx+ab$ この答えは正しい」と言って、後は学生に「もっと簡単な式で表せることができますか？」と発問した方がいいと思う。
- ・3つめ、4つめの公式を学生に図形で検証させ、授業の後で、学生にこのような質問する。「どうして①②と③④の方法が違うか?」、「どうして面積法と分配法則をつかうか?」、「何のような状況で面積法をつかうか?」、「何のような状況で分配法則をつかうか?」。

3-4. [考察] 上海24日・25日研修会 まとめ

(1) 「仲間協働」とくわかちあい>の研修

24日また25日の両日のアンケート結果より、小島の講演に対して上海の教員が強い関心を持ち研修に参加していたと明確に判断できる。また同時に、<分かちあい>授業研究を評価し、積極的に理解し取り入れていく姿勢も明らかである。また学生による模擬授業とくわかちあい>研究協議にも、参加者が好意的かつ高い関心をもって参加し、その後の<分かちあい>研究協議にも意欲的にとりくんでいることがアンケートからも読み取れる。これらのことから「<分かちあい>授業研究法」そのものが高い支持を得て、それが基盤となり初めて出会った電大理工3年生との授業研究における協働研修が成立していることが判明する^(注6)。

一方これらの背景には、教育学院が過去5年間、取り組んできた校内研修「仲間協働」による教員同士の協働研修意識があり、<分かちあい>が授業向上意欲を一層、刺激するものであったと推察できる。また同時に、上海の教員の眼前で、電大理工生たちがくわかちあい>授業研究のデモンストラーションにとりくんだこと、参加者全員

(4) 附属教員による「橋本の授業へのコメント」

研究協議用の「授業研究コメント表」は 両日の研修とも、電大理工で学生たちが使用しているものを中国版にして配布した（(注：協議後、授業者に手渡され、授業者自身が振り返りをするためにも効果がある）。附属中の回収27。どれも理工学生・橋本への附属中教員からの期待に満ちた評価と、授業指導力向上のための温かいアドバイスであった。

①評価：項目	優良	良	要改善
1) 声(大きさ・強弱)	24	1	2
2) 立ち位置(姿勢・視線等)	24	0	3
3) 説明	18	9	0
4) 指示・指名(生徒への評価)	16	11	0
5) 発問・質問	12	15	0
6) 板書・掲示	10	12	5
7) 机間巡視(声かけ等含)	7	18	2
8) 教具・プリント	21	4	2
9) 題材・ネタ	22	3	2
10) 授業の展開・メリハリ	17	10	0

②コメント：◎良い点

による研究協議の前でも学生らが常に謙虚に学び、授業指導の<くづき>を深め、その場で授業実践を研究的に、また専門的にも高めていく成長の姿を実際に目撃したことも大きな刺激となっていたことが伺えるものである。実際に24日研修会は盛り沢山のプログラムにあったに係わらず、上海の教員が学生の授業にも高い関心をもち参観し、その後の全員参加の<分かちあい>研究協議にも、みな意欲的で、各グループ協議も盛んで暖房もない寒い会場ホール全体が熱気に包まれていた研修の一日であった。最後まで、参加者全員が笑いと緊張も織り交ぜながら楽しく歓迎の気持ちも溢れた研修会で終わっている。

(2) 現職同士も学生も協働できる<分かちあい>

25日附属中の<分かちあい>授業研究は、前日24日の研修体験者も入り、授業研究は、さらに深まったものであった。教育実習前の橋本は、実習校の担当学年で予想される「乗法公式」、寧教員は現在、担当しているクラス生徒が参加し、子どもたち同士の学習活動を軸に展開した「図形／三角形の合同」の授業である^(注7)。

ここでも、二つの授業に附属中の全教員が<分かちあい>による研究協議を見事に使いこなし、それぞれに適切かつ温かく具体的な授業改善アドバイスをを行った。その一例として、学生の橋本への研究協議では、「教材把握や展開方法」の改善策も的確であり、また上記「授業コメント評価」も、これから実習を迎える学生への評価としては秀逸過ぎるものであった。一方、学生の橋本が感想で、授業実践を通じて反省的に考察していることから分かるように、日中の数学の教科書の教材構成の違い、それに基づく導入例や指導方法など、短時間の研修にもかかわらず日中の教育また学習者（生徒）理解の違いなど授業研究の本質的な課題の検討にも発展した研修会となった。

これら上海の研修から、日本での2(1)埼玉県高校数学研究会の現職教員との協働研修と同様に、<分かちあい>授業研究は、学生も現職教員も協働で共に学び、また授業研究を通じて育つことが可能であると言えるものである。また、上海の教科主任また附属中教員と、電大理工の学生たちが授業研究交流できた基盤に<分かちあい>授業研

究法が共有されていること、また<分かちあい>授業研究が学生のみならず上海の教員の授業指導力を高めるものであり、また教員同士の同僚性と専門性も育成する協働研修法であると判断できるものである。

4-1. 「第1回・国際授業研究大会」8月27日(土)

(1) 学生実行委員の手による国際授業研究大会

8月27日(土)「第1回・国際授業研究大会」は、上記の上海の授業研究交流を発展させたものである。当日、上海の現職教員と教育関係者の他、台湾からの参加者もあった。日本側は、電大理工学生(院生含)、本学卒の現職教員、埼玉県高校数学研究会の教員と教育委員会指導主事、通訳の留学生など幅広い参加となった。本大会の実行委員は3月上海で同行した4名の学生を中心に2011授業研修学生実行委員が担当し、小島と協議し運営もすべてすすめた。また大会の目玉とした「日中交流授業」も、実行委員4年生が日本側の授業代表として、上海教員と比較授業にとりくんだ。

((注)：当初、卒業生教員の予定が、夏期休業中の部活動指導また公務多忙などから変更余儀なくなり、急遽、代行となった。大会は、全参加者が<分かちあい>を基に研究交流し、授業研究を楽しみ、参加者の評価も高いものであった。大会準備と学会設立は、実習後7月からスタート約1ヶ月であった。)

(2) 日程・内容

09:00	受付【担当：厚木、堀本】		
09:30 ～開会 式 <6101 教室>	1. 開会式 ①開会挨拶【実行委員長：橋本、会長：小島】 ②来賓紹介、来賓代表者挨拶 【代表：王副校長】 ③本日の流れの説明【担当：清野】 ④<分かちあい>の説明【担当：矢城】 ⑤参加者グループ<分かちあい>(自己紹介) ⑥オープニング模擬授業【授業：橋本】 ☆単元：文字と式(研究協議司会：高橋)		
10:50 ～授業 研修会	2. 国際授業研究会(代表者による模擬授業)		
		6102室	6103室
	分野	中・数学	高・数学
授業者	日本(学生)	高橋(4年)	尾山(4年)
	中国(現職)	寧樟先生	牛麗君先生

	<table border="1"> <tr> <td>授業アドバイザー</td> <td>黒田俊郎先生 (本学)</td> <td>松本明先生 (日高高校)</td> </tr> </table>	授業アドバイザー	黒田俊郎先生 (本学)	松本明先生 (日高高校)
授業アドバイザー	黒田俊郎先生 (本学)	松本明先生 (日高高校)		
10:50 授業研修会	<p>◎ [日本・中国] 代表者の模擬授業</p> <table border="1"> <tr> <td>①日本側：模擬授業 (1)代表者の模擬授業 (2)研究協議<分かちあい> (3)全体研修 (4)授業者より一言</td> <td>②中国側：模擬授業 (1)代表者の模擬授業 (以下、〃)</td> </tr> </table> <p>③学会認定授業アドバイザーの模擬授業</p> <table border="1"> <tr> <td>研究協議：(1)学ぶ点はどこにあるのか。 (2)子どもの興味関心はどう引き出されているか</td> </tr> </table> <p>など、直接指導を受ける。</p>	①日本側：模擬授業 (1)代表者の模擬授業 (2)研究協議<分かちあい> (3)全体研修 (4)授業者より一言	②中国側：模擬授業 (1)代表者の模擬授業 (以下、〃)	研究協議：(1)学ぶ点はどこにあるのか。 (2)子どもの興味関心はどう引き出されているか
①日本側：模擬授業 (1)代表者の模擬授業 (2)研究協議<分かちあい> (3)全体研修 (4)授業者より一言	②中国側：模擬授業 (1)代表者の模擬授業 (以下、〃)			
研究協議：(1)学ぶ点はどこにあるのか。 (2)子どもの興味関心はどう引き出されているか				
12:40	昼食休憩：授業アドバイザーを囲んで。			
13:30 研究報告	<p>3. <分かちあい>による授業研究の事例報告</p> <p>○<分かちあい方式>による授業研究の効果</p> <p>①神奈川県教育委員会 (旧) 愛甲教育事務所の研修報告 【報告：田所直子先生】</p> <p>②中国・上海の<分かちあい>授業研究の報告 【報告：佟】</p>			
14:10 講演	<p>4. 学会設立経緯と今後 【講演：小島】</p> <p>(1)授業実践の研究報告</p> <p>①<分かちあい>開発に至るまでの経緯</p> <p>②教育現場で通じる実践的指導力を高める方法</p> <p>(2)臨床的教師研修学会の活動方針</p> <p>①学会設立および本大会開催に至る経緯</p> <p>②本学会の案内およびこれからの歩みについて</p>			
14:50 模擬授業	<p>5. 現職教員による模擬授業【授業者：大高恭介先生 (2006卒業：さいたま市城南中学校教諭)】</p> <p>*<メビウスの輪>から関数の導入へ</p>			
15:30 授業研修	<p>6. 授業づくりフェスティバル 【司会：新井、堀本：修士1年】</p> <p>(1)グループ作り (「日中混合チーム」も検討)</p> <p>(2)課題単元の発表<課題単元：絶対値> 【提案者：新井健司】</p> <p>(3)授業づくり (導入10分間の工夫)</p> <p>※子どもの興味関心を育てる授業展開を重視。</p> <p>(4)代表グループによる模擬授業</p> <p>(5)<分かちあい>研修</p>			

16:10 閉会式	<p>7. 閉会式【司会：清野】</p> <p>(1)研修全体の各自の<気づき>を振り返る</p> <p>(2)グループで(1)を<分かちあい></p> <p>(3)全体で感想の発表</p> <p>(4)閉会挨拶【挨拶：高橋】</p>
--------------	---

4-2. 日中の現職研修における<分かちあい>

(1) <分かちあい>の現職研修における効果

国際大会の中では、日中の現職研修における<分かちあい方式>による授業研修の効果、神奈川県教育委員会 (旧) 愛甲教育事務所の事例と、上海研修については佟が研究発表とした。(注)神奈川県 (旧) 愛甲教育事務所では、平成17 (2005) 年から初任者研修の一環として、小島が「模擬授業研究および研究協議」の講演と研修指導をし、<分かちあい>授業研究を実施。19年度、理工4年生4名が、初任者教員65名 (他に、拠点校指導教員11名、指導主事6名) の前で<分かちあい>授業研究を実際に展開し、その後、初任者全員が学年別また教科別グループに分かれ、<分かちあい>授業と研究協議に取り組んでいる。

① (旧) 愛甲教育事務所における研修報告

平19年度初任者研修担当の田所直子指導主事が報告した。

- ・平19年初任者研修の特色は、<分かちあい>授業研究により、初任者教員全員が研修会を通じて傾聴され共感され、否定されることなく発言する機会を得て、司会も経験。また研究協議の内容をまとめる体験を得た。
- ・初任者アンケートから、初任教員が「<分かちあい>は初めてだったが、とてもいい学び合いができてよかった。みんなが高まっていくのを感じた」「<分かちあい>は安心できる研究方法だった。仲間のあたたかさを感じた」「<共感する><ねぎらう>ということの大切さを実感した。授業を行う前にこんなに考えることができれば、授業をやるのが楽しくてしかたがないなと思った」など、初任者の授業研究また授業づくりへの意欲を育てる効果的な方法である。
- ・事務所では、研修とアンケート結果から、初任者自身が授業研究について大変前向きに取り組み、充実感を持って取り組んだことを高く評価した。

②平成19年度・初任者研修会アンケート結果

【研修期日】平成19年8月17日、24日

【参加者】65名 (小学校初任者44、中学校初任者21)

5：とても思う 4：思う 3：どちらかといえば 思う 2：あまり思わない 1：思わない			5	4	3	2	1	平均
(1) <分かちあい>の授業研究・研究協議を理解できた。	小	18	19	3	0	0		4.4
	中	11	8	2	0	0		4.4
(2) 機会があれば、協働で授業研究を行いたい。	小	30	8	2	0	0		4.7
	中	15	5	1	0	0		4.7
(3) 研修をととして、自らの授業の課題と改善策を考えることができた。	小	15	19	4	2	0		4.2
	中	14	7	0	0	0		4.7
(4) 研修で学んだことを2学期の授業に活かしたい。	小	36	4	0	0	0		4.9
	中	19	2	0	0	0		4.9

(2) 中国・上海の<分かちあい>授業研究の報告

上海での事例は、佟が3月24日閔行区中小学校教科主任研修会、25日上海市師質培訓中心実験基地附属中学校のアンケート結果(3-2.3-3)をもとに報告した。まとめとして「<分かちあい>は、教師全員が平等で、また尊敬しあえる優れた方法」であると結論づけた^(注8)。

5. まとめ

本実践研究により「<分かちあい>による授業研究と研究協議」は、現職教員と学生が協働研修にとりくめる方法であり、また上海の現職教員にとっても研修効果が高く、日本における実践研究と共通した成果を上げていることが判明する。また同様に、授業指導力の育成を必須課題とした教育実習事前学生たちや、教職スタート時の初任者教員にとっても「<分かちあい>授業研究」は、授業研究と授業づくりへの積極性と意欲また展望をつくり出してゆく方法であることが分かる。

以上により、「<分かちあい>による授業研究」は、教職志望学生、現職教員また教育関係者も協働研修にとりくめ、教職スタート時の未熟な授業段階から熟達レベルまで授業の専門的資質の向上と連携を促進し、またそれは学生と教師の成長と発達に寄与するものであると結論づけることができる。

【注】

- (1) <分かちあい>による授業研究また研究を通じての学生たちの活動と成長については、本誌4号(2006, 6号(2008, 8号(2010)の実践研究論文に詳しい。

(2) 長谷川真弓著・小島勇監修「<分かちあい>から始まる授業研究—全日本教職学生授業研修大会を中心に—」『理科教育ニュース』801-803号, 2010年を参照。

(3) 例えば、2010年9月25日・日本教師教育学会第20回研究大会で「学生の手による授業研修およびICT活用授業研究についての実践研究—半年間で教育現場に通じる授業指導力を向上させる取り組み—」を、小島と共に新井健司(4年)、細田美香(4年)、清野純樹(3年)が共同発表(本学会では過去8年継続発表がある)。

また同年12月16日、香港の<東アジア教師教育研究国際大会>では、2010授業研修学生実行委員代表3名(4年)小川俊、齋田優一、渡邊大雅が「<学生主体の授業研究>および<3D授業研究の開発>」を(小島・山住直政(電大高校)と)共同研究発表している。

(4) 上海の教師は5年間毎、240時間の研修が義務づけられている。岩田(2011下記参)は「各省に置かれた教育学院等の研修施設、インターネット活用の遠隔双方向教育など多様な研究も実施」と報告している。

(5) 1月末の最終講義後、3年生10数名に呼びかけ上海研修と学生による模擬授業計画を提案。学生の協議は、(卒業前の4年生と比べ)自分たちの授業レベルは未熟で人前で発表できるものでないと前向とならなかった。小島が「授業が下手でも行ければ行きたい希望者は?」の問いに、4名がおそろおそろ挙手。後、4名と準備期間は1ヶ月。震災影響下の厳しい中、学生4名は急速に実践力の向上を果たしてゆく。

(6) 筆者の徐と佟は、本講演後間もなく「<分かちあい>授業研究」を活用する教師が多数あり、また校内研修に導入の学校も出ていることを把握している。

(7) 寧教員の授業の特色は、タッチパネル式電子黒板活用で、導入時から生徒の学習意欲を引き出す活動と工夫を豊富に盛り込んだものである。前日の肖教員にも共通しているが、上海の教員の授業は生徒の思考、論理、着想など刺激する発問が多く、かつスピードある展開である。

(8) 上海における<分かちあい>授業研究の成果については、小島勇：徐国梁：佟輝：橋本健太郎：清野純樹『日中における<分かちあい>方式による授業研究の実践研究—<上海市閔行区教師研修>と<電大理工学生の研修>から—』日本教師教育学会第21回研究大会(福井大学、2011年9月18日)の共同発表で、徐と佟が詳しくとりあげている。

【引用参考文献】

- ・岩田康之「中国の教員養成から日本を見る」ジァース教育新社『Synapse』Vol.09, 10-13頁, 2011年。
- ・徐国梁等著『伙伴合作』上海教育出版社, 2010年。
- ・小島勇『臨床的教師研修』北大路書房, 2004年。
- ・小島勇「<実践的指導力を育成する教員養成教育>に関する実践研究」『東京電機大学総合文化研究』第4号, 11-18頁, 2006年。
- ・饒從満「中国における教員研修の課題と展望」東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター編『東アジアの教師はどう育つか』東京学芸大学出版会, 116-132頁, 2008年。